

福岡県内の市町村の『要保護児童対策地域協議会における「ヤングケアラー」に係る情報把握及び対応について』の調査結果

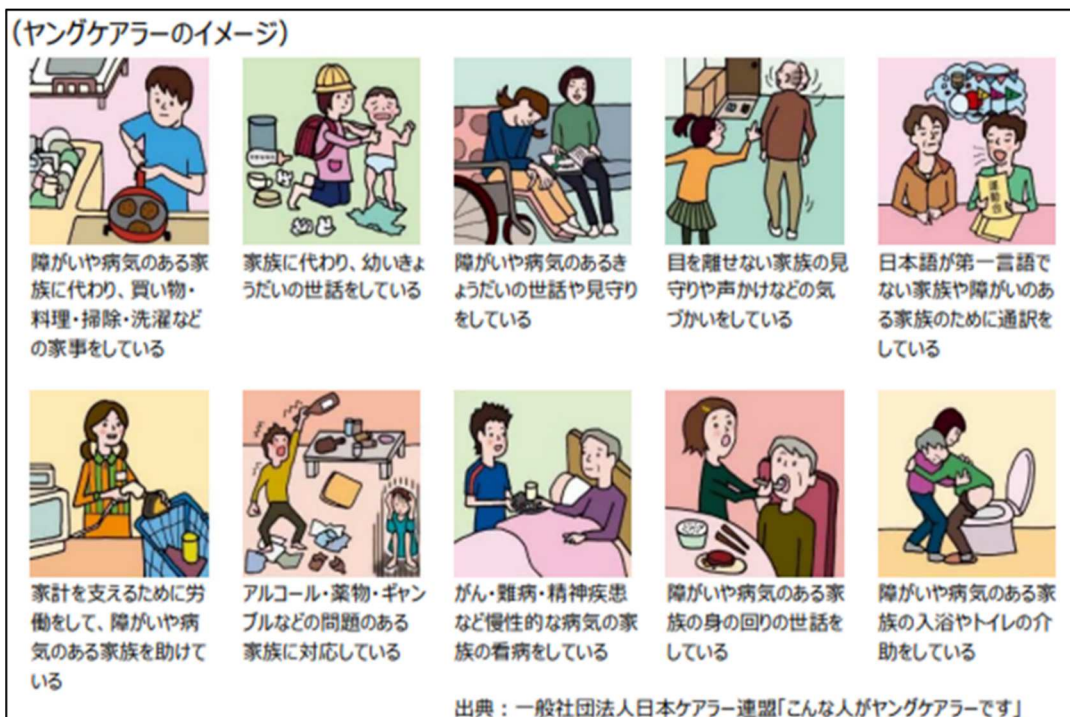
【調査目的】

福岡県内の市町村の要保護児童対策地域協議会において、ヤングケアラーがどのようにとらえられているかを把握するとともに、実際に把握されているヤングケアラー個々のケースの実態を知るため、アンケート調査を行う。

【定義】

年齢や成長の度合いに見合わない重い責任や負担を負って、本来、大人が担うような家族の介護（障がい・病気・精神疾患のある保護者や祖父母への介護など）や世話（年下のきょうだいの世話など）をすることで、自らの育ちや教育に影響を及ぼしている 18 歳未満の子ども

※令和元年7月4日付子家発 0704 第1号「要保護児童対策地域協議会におけるヤングケアラーへの対応について」から抜粋



【調査方法】

県内 60 市町村の要保護児童対策地域協議会に対しメールで調査票を配布、令和 2 年 4 月 1 日時点で市町村が把握しているヤングケアラーの状況等について、メールで回収

- ◆期間：令和 2 年 10 月 21 日(水)～令和 3 年 1 月 8 日(金)
- ◆回収状況：60 市町村から回収（回収率 100%）
- ◆収集ケース数：132 件

1 市町村の状況（基本事項調査票）

（1）実態の把握

「ヤングケアラー」と思われる子どもの実態について把握しているかについて、「把握している」が40.0%、「該当すると思われる子どもはいるが、その実態は把握していない」が20.0%、「該当する子どもがいない」が40.0%となっている。

自治体規模別での「把握している」の割合は、政令指定都市・中核市で66.6%、人口10万人以上の自治体で100.0%、人口10万人未満で31.4%となっている。

また、把握している内容については、「きょうだいのケア」が95.8%と最も高く、次いで「家事」（75.0%）、「身の回りの世話」（66.7%）となっている。

「ヤングケアラー」である、または同様のものとして捉えているケース数は、60自治体で合計132件、平均2.2件となっている。

図 1

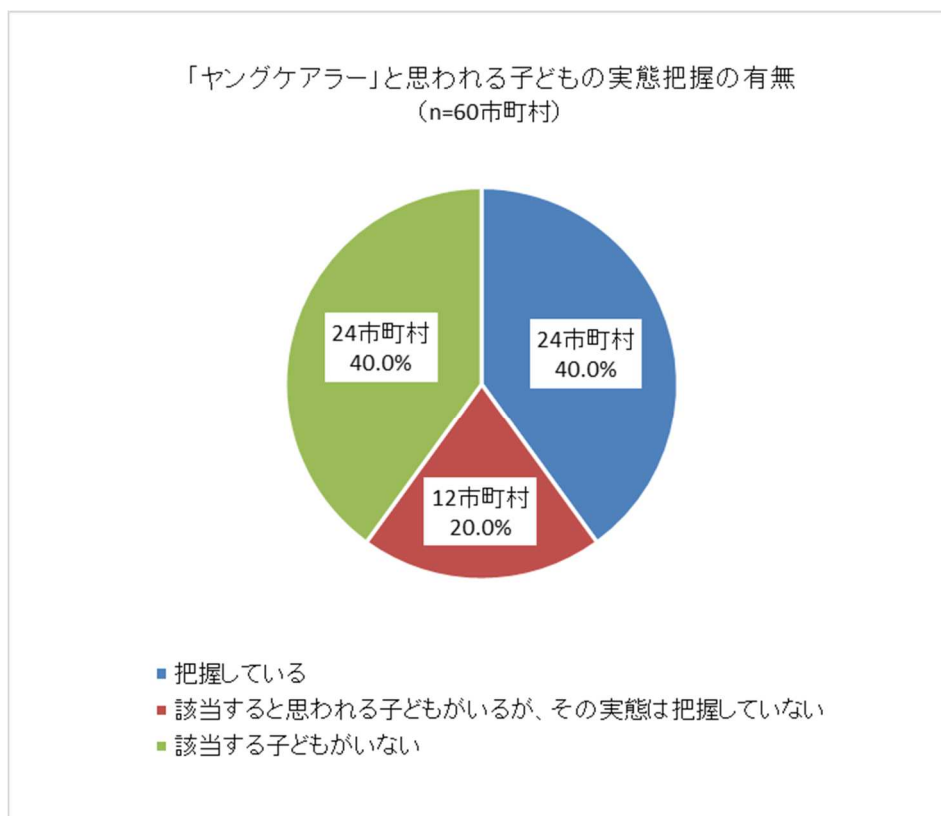


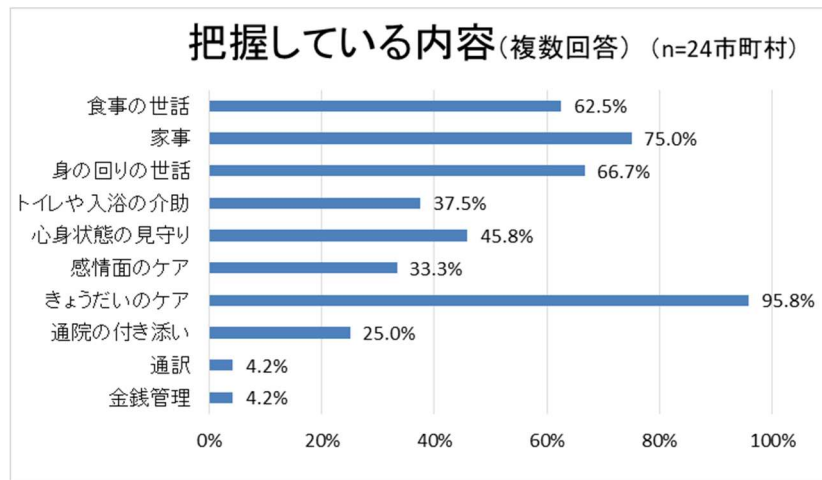
表 1

「ヤングケアラー」と思われる子どもの実態把握の有無<自治体規模別> (n=60 市町村)

(%)

	把握している	該当すると思われる子どもがいるが、その実態は把握していない	該当する子どもがいない
政令指定都市・中核市 (n=3)	66.7	0.0	33.3
人口 10 万人以上 (n=6)	100.0	0.0	0.0
人口 10 万人未満 (n=51)	31.4	23.5	45.1

図 2



※上記の項目以外にも、「アルバイト代を家に入れる」「生活保護申請等の諸手続」「父母に代わって保育園等への送り迎え」などが挙げられた。

表 2

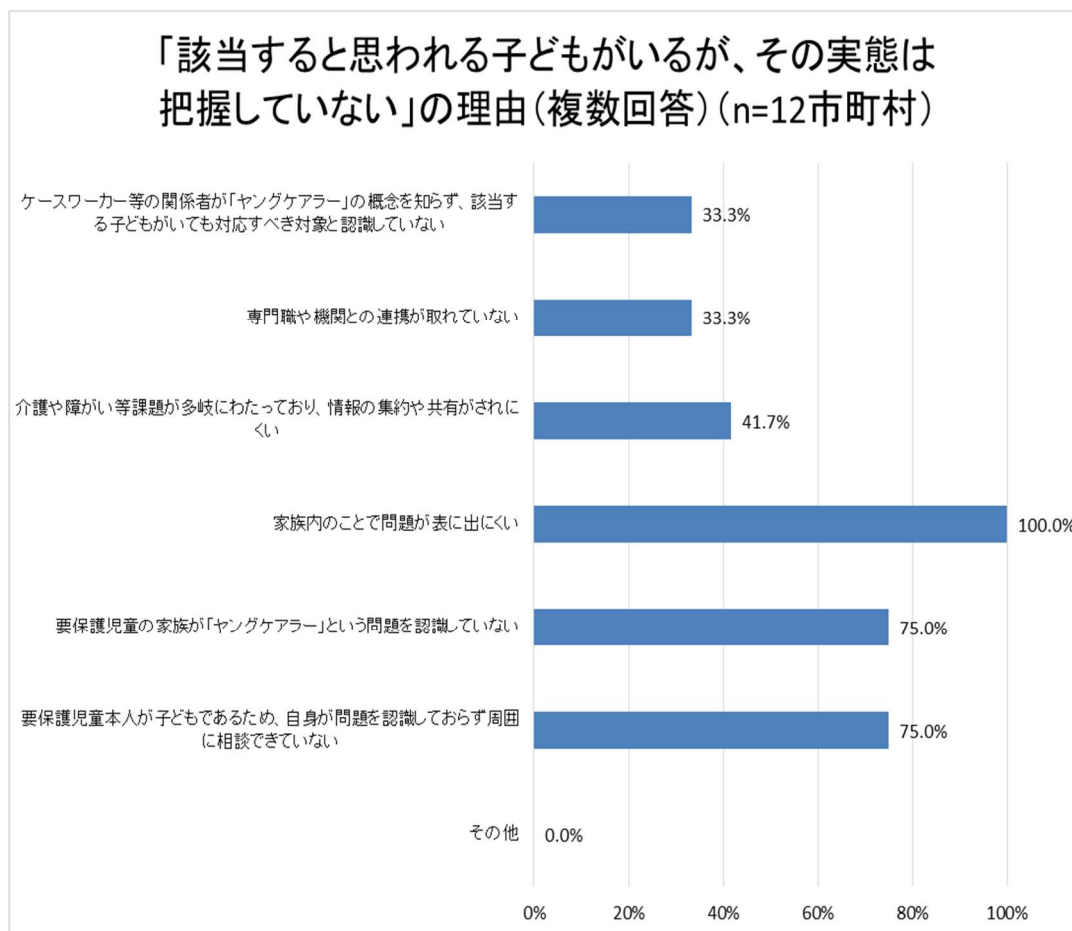
「ヤングケアラー」または同様のものとして捉えている件数 (n=24 市町村)

(%)

把握している件数	1 件	2 件	3 件	4 件	5 件	6 件	7 件以上
自治体数 (n=24)	12.5%	20.8%	8.3%	16.7%	8.3%	4.2%	29.2%

「該当すると思われる子どもはいるが、その実態は把握していない」理由としては、「家族内のことで問題が表に出にくい」が100.0%であり、次いで「要保護児童の家族が問題を認識していない」「要保護児童本人が問題を認識しておらず周囲に相談できていない」が75.0%で並んだ。

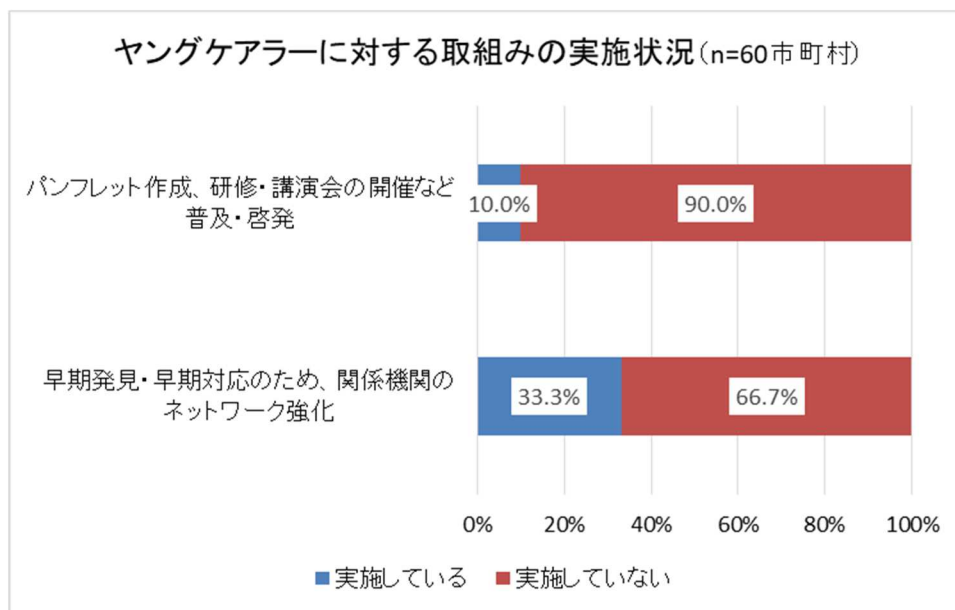
図 3



(2)「ヤングケアラー」に対する要保護児童対策地域協議会（以下「要対協」という。）としての取り組み

「パンフレット作成、研修、講演会の開催など普及・啓発」を実施している市町村は10.0%で、「早期発見・早期対応のため、関係機関のネットワーク強化」を実施しているのは33.3%であった。

図 4



【パンフレット作成、研修講演会の開催など普及・啓発】

- ・ 市民向けの公開講座、出前講座等[2市]
- ・ 要対協、校長会、他の研修会等での普及啓発[1市1町]
- ・ 「「ヤングケアラー」の早期発見・ニーズ把握に関するガイドライン（案）」を実務者会議で配布[1町]
- ・ 関係機関へのアセスメントシート等の配布[1市]

【早期発見・早期対応のため、関係機関のネットワーク強化】

- ・ 小、中学校においてスクリーニングシートを使用して早期発見に努める[1市]
- ・ 関係機関と連携し、情報共有を行う[その他19市町村]

(3) 支援を行う際の留意点・支援が難しいと思うケース

[支援を行う際の留意点]

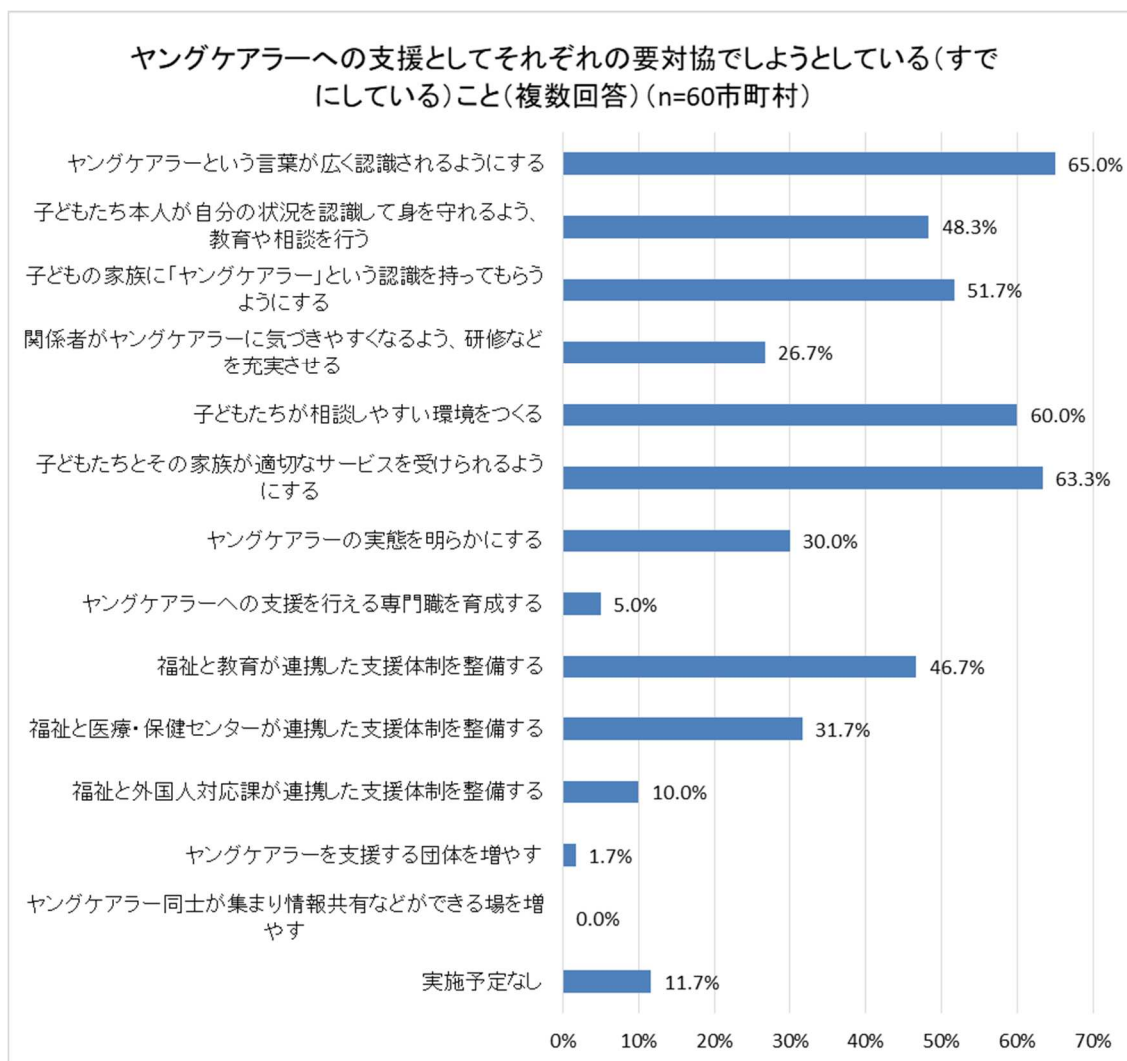
- ・当該ケアを他の誰がすべきかなど世帯全体の支援を考える
- ・保護者を批判せず、まずは現状を受け入れる
- ・ケアを担う子どもの気持ちや意向を尊重する
- ・多子世帯や親の養育能力不足または精神疾患の場合が多い
- ・当該ケア以外に問題が隠れていないか
- ・子どもとの距離感を保ち、味方だと思ってもらう
- ・子ども本人に、やりたいことができる権利があることを伝える
- ・家庭内の役割分担を明確化する作業を保護者と一緒に行う
- ・子ども自身がケアを自分の役割として認識しており、認識の修正や、役割を失った喪失感などに対する支援が必要

【支援が難しいと思ったケース】

- ・保護者の理解が得られない、支援に拒否的である
- ・親も「ヤングケアラー」に該当する環境で育ってきたケースなど、当事者たちに問題の認識がない
- ・利用できる福祉サービスがない（利用要件に該当しない）
- ・子どもが親を気遣い家庭の事情を話さないため、把握が困難
- ・子どもの訴えや子どもの生活状況に必要な点（遅刻欠席、授業態度が悪い、身なり服装が汚れている等）が認められない場合は介入が難しい
- ・「きょうだい児へのケア」が主訴であり、家庭介入が難しい

「ヤングケアラー」への支援について実施しようとしている（すでに行っている）ことについては、「ヤングケアラー」という言葉が広く認識されるようにする」が65.0%と最も高く、次いで「子どもたちとその家族が適切なサービスを受けられるようにする」（63.3%）、「子どもたちが相談しやすい環境をつくる」（60.0%）となっている。

図 5



2 把握するケースの状況（ケース個票）

（1）「ヤングケアラー」の状況

①属性

性別については男性が31.1%、女性が68.9%となっている。学年別にみると、未就学（男性2人、女性1人）を除くすべての学年で女性の方が多くなっている。

学年では小学生が46.2%と最も高く、次いで中学生（34.9%）、高校生（12.1%）となっている。

世帯構成としては夫婦・パートナーと子どもにより構成される家庭が47.0%と最も多く、次いでひとり親家庭（45.5%）となっている。

きょうだいの有無については、大半がきょうだいがいるとしており、きょうだいの人数の平均は4.2人となっている。きょうだいがいる人については、自分がきょうだいの中で「1番目」「2番目」の人が多くなっている。

図 6

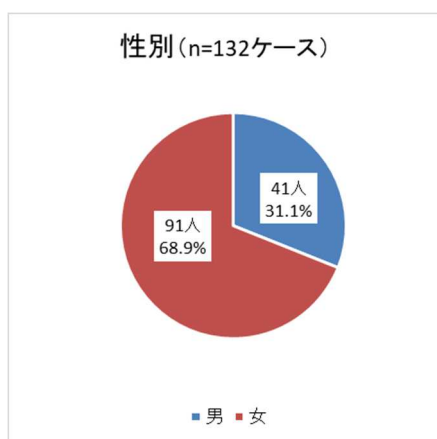


図 7

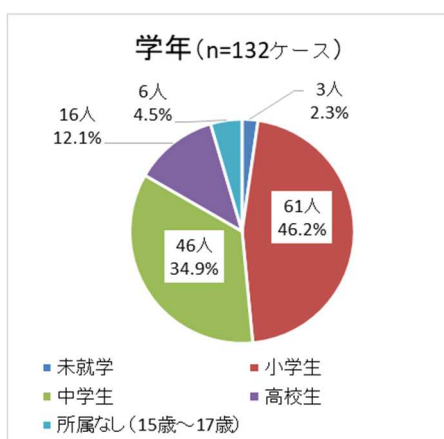


図 8

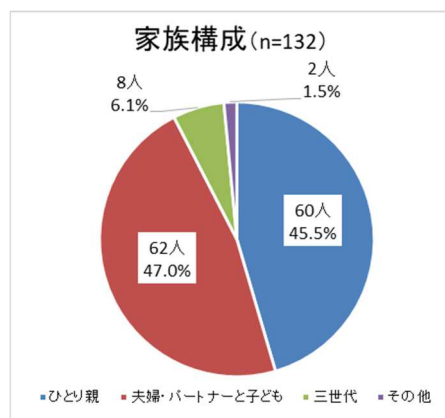
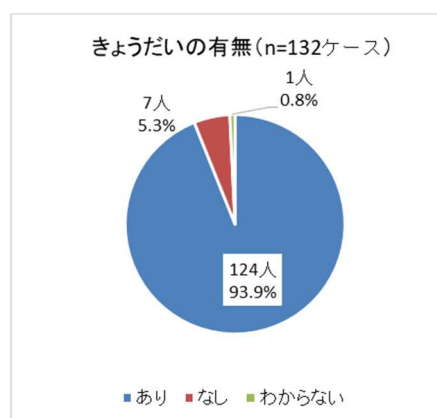


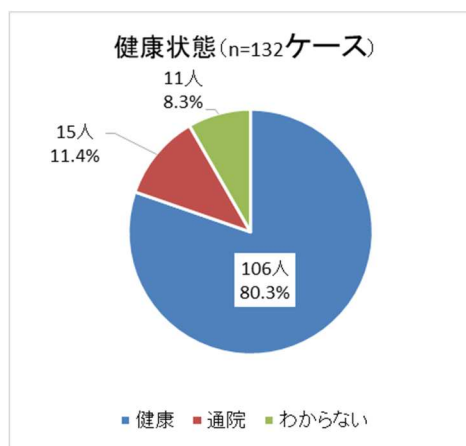
図 9



②健康状態

「ヤングケアラー」の子どもの健康状態については、「健康（通院していない）」が80.3%、「通院中」が11.4%、「わからない」が8.3%となっている。

図 10



③相談種別

要対協における相談種別としては、ネグレクトが38.6%と最も高く、次いで心理的虐待(20.5%)、要支援(17.4%)、身体的虐待(12.1%)と続いた。

図 11

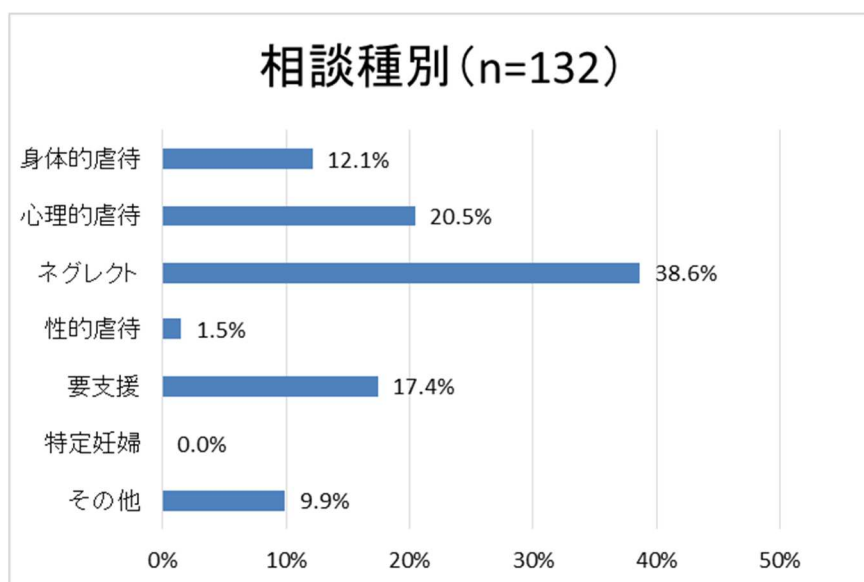


表 4

相談の種別＜学年別・子ども自身の認識の有無別＞

(%)

		身体的虐待	心理的虐待	ネグレクト	性的虐待	要支援	特定妊婦	その他
全体 (n=132 ケース)		12.1	20.5	38.6	1.5	17.4	0.0	9.9
学年	未就学 (n=3)	0.0	66.7	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0
	小学生 (n=61)	16.4	21.3	39.3	0.0	16.4	0.0	6.6
	中学生 (n=46)	8.7	17.4	36.9	2.2	15.2	0.0	19.6
	高校生 (n=16)	12.5	18.8	43.7	0.0	25.0	0.0	0.0
	所属なし (15～17 歳) (n=6)	0.0	16.7	33.3	16.7	33.3	0.0	0.0
子ども自身の認識の有無	認識あり (n=16)	18.7	12.5	56.3	0.0	12.5	0.0	0.0
	認識なし (n=57)	14.0	17.5	45.6	1.8	10.5	0.0	10.6
	わからない (n=59)	8.5	25.4	27.1	1.7	25.4	0.0	11.9

④学校生活への影響

132 ケース中「学校等にもあまり行けていない（休みがちなど）」の 36.4%が最も高く、次いで「学校生活に支障は見られない」（27.3%）、「忘れ物が多かったり、宿題をしてこない」（18.9%）となっている。

学年別にみると、中学生では「学校等にもあまり行けていない（休みがちなど）」（45.7%）が、高校では「学校等に行っており、学校生活に支障は見られない」（43.8%）が他の学年に比べて高くなっている。また、子ども自身が「ヤングケアラー」として認識しているかどうかでみると、認識していない人は「遅刻が多い」、「忘れ物が多かったり、宿題をしてこないことが多い」が認識している人に比べて高くなっている。

図 12

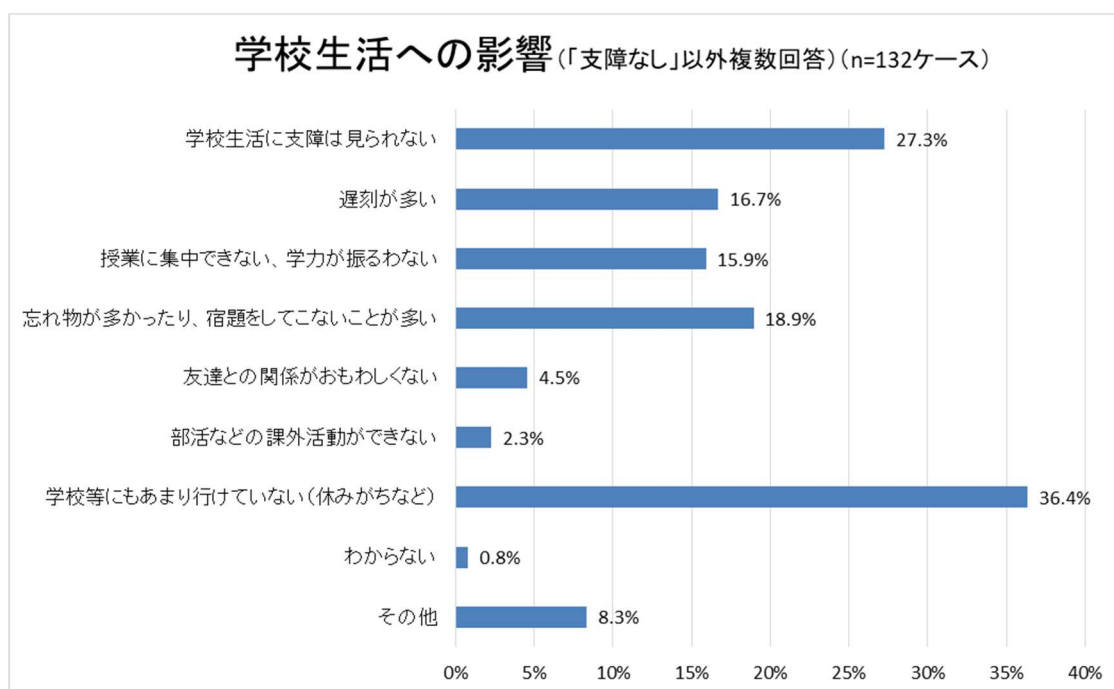


表 5

「ヤングケアラー」の学校生活への影響(複数回答)

<学年別・子ども自身の認識の有無別>

(%)

		見られない	遅刻が多い	学力が振るわない	授業に集中できない、 授業に集中できない、 をしてこないことが多い	忘れ物が多かったり、宿題	友達との関係が おもわしくない	部活などの課外活動が できない	学校等にもあまり行け ていない	わからない	その他
全体(n=132 ケース)		27.3	16.7	15.9	18.9	4.5	2.3	36.4	0.8	8.3	
学年	未就学(n=3)	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	
	小学生(n=61)	23.0	21.3	14.8	24.6	3.3	1.6	34.4	0.0	3.3	
	中学生(n=46)	28.3	15.2	23.9	15.2	4.3	2.2	45.7	0.0	8.7	
	高校生(n=16)	43.8	6.3	6.3	18.8	12.5	6.3	31.3	6.3	0.0	
	所属なし(15~17歳)(n=6)	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	0.0	66.7	
子ども自身の認識の有無	認識あり(n=16)	25.0	6.3	25.0	18.8	6.3	6.3	43.8	0.0	6.3	
	認識なし(n=57)	24.6	21.1	15.8	29.8	5.3	1.8	33.3	1.8	7.0	
	わからない(n=59)	30.5	15.3	13.6	8.5	3.4	1.7	37.3	0.0	10.2	

⑤生活保護受給の有無

生活保護受給世帯かどうかについては、「受給世帯である」は27.3%、「受給世帯ではない」が72.7%となっている。

また、子ども自身の「ヤングケアラー」の認識別では、子ども自身が「ヤングケアラー」と認識している人の方が「生活保護受給世帯」の割合が高い。

図 13

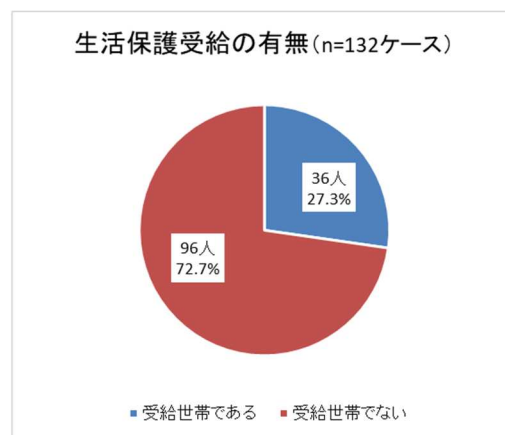


表 6

生活保護受給の有無

<学年別・子ども自身の認識の有無別>

(%)

		生活保護 受給世帯	生活保護 受給世帯 ではない
全体(n=132 ケース)		27.3	72.7
学年	未就学(n=3)	33.3	66.7
	小学生(n=61)	23.0	77.0
	中学生(n=46)	23.9	76.1
	高校生(n=16)	50.0	50.0
	所属なし(15~17歳)(n=6)	33.3	66.7
子ども自身の 認識の有無	認識あり(n=16)	43.7	56.3
	認識なし(n=57)	26.3	73.7
	わからない(n=59)	23.7	76.3

(2) 登録に至った経緯

発見者は、「学校」が59.1%と最も高く、次いで「その他」(27.3%)となっている。

学年別にみると、中学生、高校生など年齢が高くなるにつれ「学校」の割合が高くなっている。

通告者についても、「学校」が57.6%と最も高くなっている。

図 14

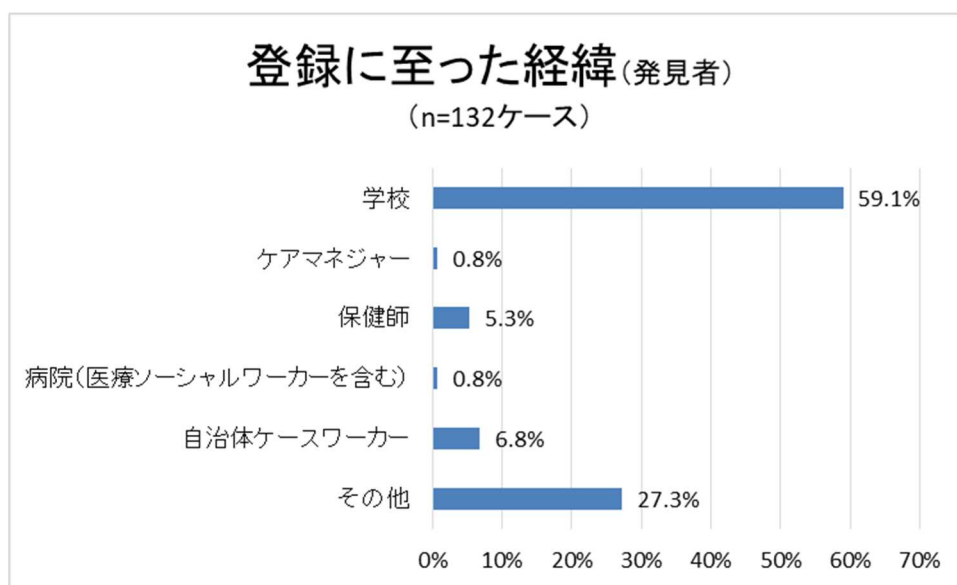


表 7

登録に至った経緯・理由(発見者) <学年別・子ども自身の認識の有無別>

(%)

		学校	ケアマネジャー	保健師	病院(MSW含む)	自治体のCW	その他
全体(n=132 ケース)		59.1	0.8	5.3	0.8	6.8	27.2
学年	未就学(n=3)	0.0	0.0	66.7	0.0	0.0	33.3
	小学生(n=61)	65.6	0.0	3.3	1.6	8.2	21.3
	中学生(n=46)	58.7	0.0	4.3	0.0	4.3	32.7
	高校生(n=16)	43.7	6.3	0.0	0.0	12.5	37.5
	所属なし(15~17歳)(n=6)	66.7	0.0	16.7	0.0	0.0	16.6
認識の有無	認識あり(n=16)	50.0	0.0	0.0	6.3	0.0	43.7
	認識なし(n=57)	68.4	0.0	8.8	0.0	7.0	15.8
	わからない(n=59)	52.5	1.7	3.4	0.0	8.5	33.9

図 15

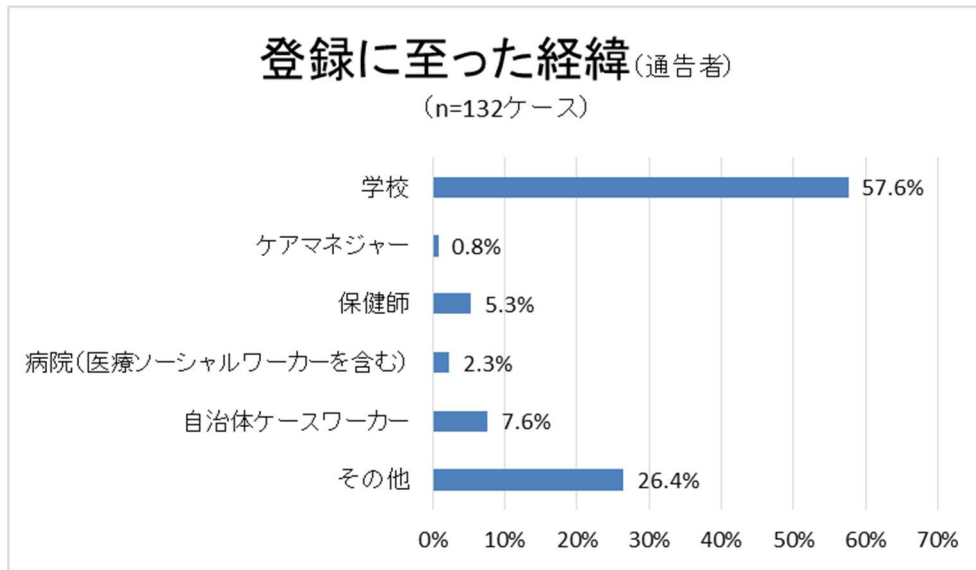


表 8

登録に至った経緯・理由(通告者) <学年別・子ども自身の認識の有無別>

(%)

		学校	ケアマネジャー	保健師	病院(MSW含む)	自治体のCW	その他
全体(n=132 ケース)		57.6	0.8	5.3	2.3	7.6	26.4
学年	未就学(n=3)	0.0	0.0	66.7	0.0	0.0	33.3
	小学生(n=61)	67.2	0.0	3.3	3.3	8.2	18.0
	中学生(n=46)	52.1	0.0	4.4	2.2	6.5	34.8
	高校生(n=16)	43.7	6.3	0.0	0.0	12.5	37.5
	所属なし(15~17歳)(n=6)	66.6	0.0	16.7	0.0	0.0	16.7
子ども自身の認識の有無	認識あり(n=16)	50.0	0.0	0.0	6.3	0.0	43.7
	認識なし(n=57)	64.9	0.0	8.8	3.5	5.3	17.5
	わからない(n=59)	52.5	1.7	3.4	0.0	11.9	30.5

(3) ケアの開始時期

ケアの開始時期（年齢区分）については、「わからない」が44.7%で最も多く、次いで7歳以上13歳未満の37.1%、7歳未満の10.6%、13歳以上16歳未満の7.6%となった。

図 16

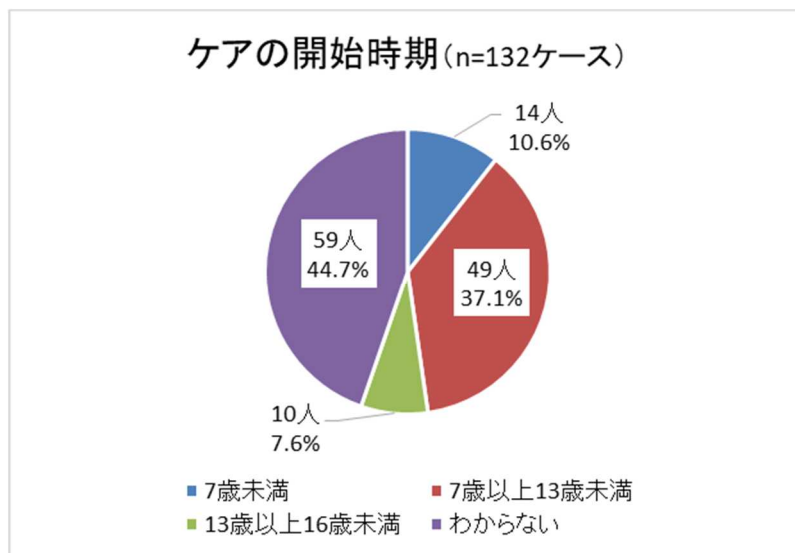


表 9

ケアの開始学年 < 学年別・子ども自身の認識の有無別 >

(%)

		7歳未満	13歳未満	7歳以上	16歳未満	13歳以上	わからない
全体 (n=132 ケース)		10.6	37.1	7.6	44.7		
学年	未就学 (n=3)	100.0	-	-	0.0		
	小学生 (n=61)	13.1	44.3	-	42.6		
	中学生 (n=46)	6.5	34.8	13.0	45.7		
	高校生 (n=16)	0.0	25.0	12.5	62.5		
	所属なし (15~17歳) (n=6)	0.0	33.3	33.3	33.4		
認識の有無 子ども自身の	認識あり (n=16)	12.5	50.0	0.0	37.5		
	認識なし (n=57)	19.3	42.1	12.3	26.3		
	わからない (n=59)	1.7	28.8	5.1	64.4		

(4) 子ども自身の「ヤングケアラー」の認識の有無

子ども自身の「ヤングケアラー」の認識の有無については、「子ども自身が「ヤングケアラー」と認識している」が12.1%、「子ども自身が「ヤングケアラー」と認識していない」が43.2%、「わからない」が44.7%となっている。

学年別にみると、「子ども自身が「ヤングケアラー」と認識している」のは、小学生では4.9%であるのに対し、高校生では31.2%と、年齢があがるにつれ、認識している割合が高くなっている。

図 17

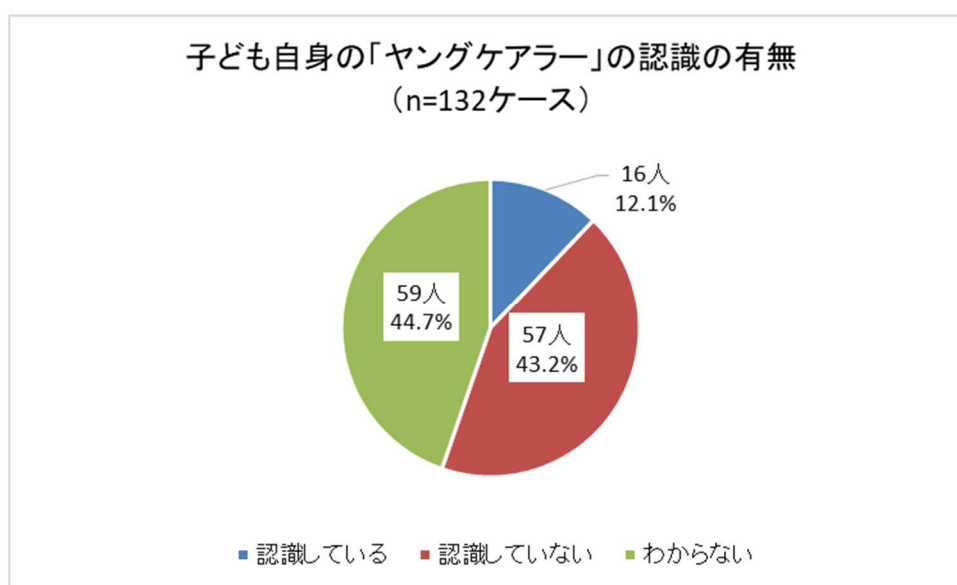


表 10

子ども自身の「ヤングケアラー」の認識の有無 <学年別>

(%)

		認識している	認識していない	わからない
全体 (n=132 ケース)		12.1	43.2	44.7
学年	未就学 (n=3)	0.0	100.0	0.0
	小学生 (n=61)	4.9	42.6	52.5
	中学生 (n=46)	17.4	45.6	37.0
	高校生 (n=16)	31.2	25.0	43.8
	所属なし (15~17 歳) (n=6)	0.0	50.0	50.0

(5) 子どもがケアを行っている状況

①ケアの対象者とケアの内容

ケアを行っている対象者については、「きょうだい」が82.6%と最も高く、次いで「母親」(45.5%)となっている。ひとり親では「母親」が他に比べて高くなっている。

図 18

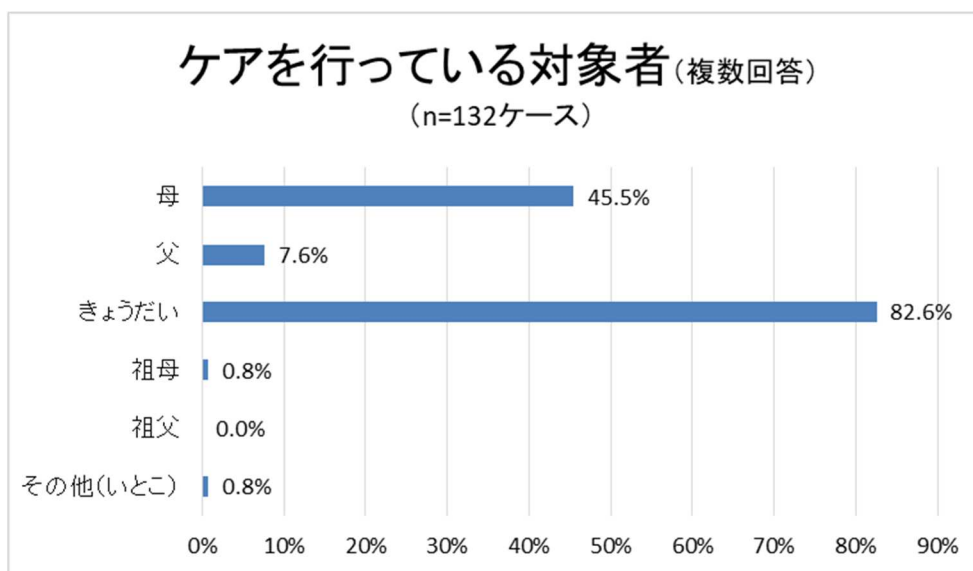


表 11

ケアを行っている対象者(複数回答) <学年別・子ども自身の認識の有無別>

		母親	父親	きょうだい	祖母	祖父	その他
全体 (n=132 ケース)		45.5	7.6	82.6	0.8	0.0	0.8
学年	未就学 (n=3)	66.7	66.7	100.0	0.0	0.0	0.0
	小学生 (n=61)	36.1	3.3	85.3	0.0	0.0	1.6
	中学生 (n=46)	52.2	6.5	78.3	2.2	0.0	0.0
	高校生 (n=16)	56.3	6.3	87.5	0.0	0.0	0.0
	所属なし(15~17歳) (n=6)	50.0	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0
認識の有無 子ども自身の	認識あり (n=16)	31.3	6.3	87.5	0.0	0.0	0.0
	認識なし (n=57)	54.4	12.3	80.7	1.8	0.0	1.8
	わからない (n=59)	40.7	3.4	83.1	0.0	0.0	0.0

ケアを行っている対象別に要介護・障がい等の有無をみると、母親では「精神障がい」(51.7%)が半数を占め、父親は「依存症」(30.0%)の割合が他に比べて高くなっている。また、きょうだいでは「幼い」(66.1%)が半数以上を占めている。

また、ケアを行っている対象者別のケアの内容をみると、母親では「家事(66.7%)」、「感情面のケア」(31.7%)、「食事の世話」(18.3%)が高くなっている。父親も母親と同様に「家事」(60.0%)が高くなっている。きょうだいでは、「きょうだいのケア」(79.8%)、「身の回りの世話」(39.4%)、「見守り」(33.0%)が高い。

表 12

ケアを行っている対象者別 要介護・障がい等の有無(複数回答)

(%)

	要支援・要介護	身体障がい	知的障がい	精神障がい	発達障がい	依存症	幼い	その他	要支援・障がい等なし
母(n=60 ケース)	0.0	3.3	1.7	51.7	5.0	11.7	0.0	18.3	30.0
父(n=10)	10.0	10.0	0.0	10.0	10.0	30.0	0.0	40.0	30.0
きょうだい(n=109)	0.0	3.7	11.9	1.8	4.6	0.0	66.1	4.6	18.3
祖母(n=1)	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
その他(いとこ)(n=1)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0

表 13

ケアを行っている対象者別 ケアの内容(複数回答)

(%)

	食事の世話	家事	身の回りの世話	トイレや入浴の介助	見守り	感情面のケア	きょうだいのケア	通院の付き添い	通訳	金銭管理	その他
母(n=60 ケース)	18.3	66.7	10.0	3.3	6.7	31.7	11.7	6.7	1.7	0.0	13.3
父(n=10)	0.0	60.0	40.0	10.0	10.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0
きょうだい(n=109)	30.3	30.3	39.4	13.8	33.0	0.9	79.8	7.3	0.0	0.9	5.5
祖母(n=1)	100.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
その他(いとこ)(n=1)	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

(6) ケアに費やす時間の把握

1日のうちケアに費やす時間については、「把握している」が10.6%、「わからない・把握していない」が89.4%であった。

把握している中では、ケアに費やしている時間は1日平均3.1時間、夜間のケアは平均0.6時間となっている。

図 19

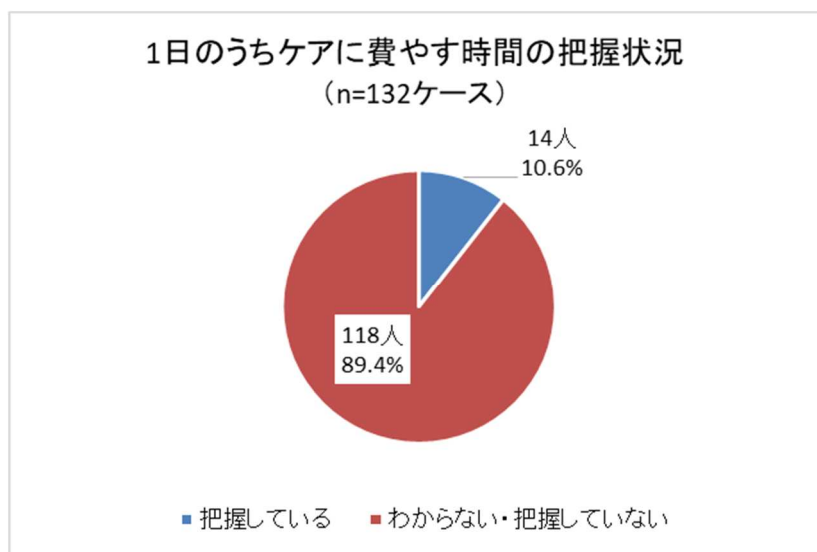
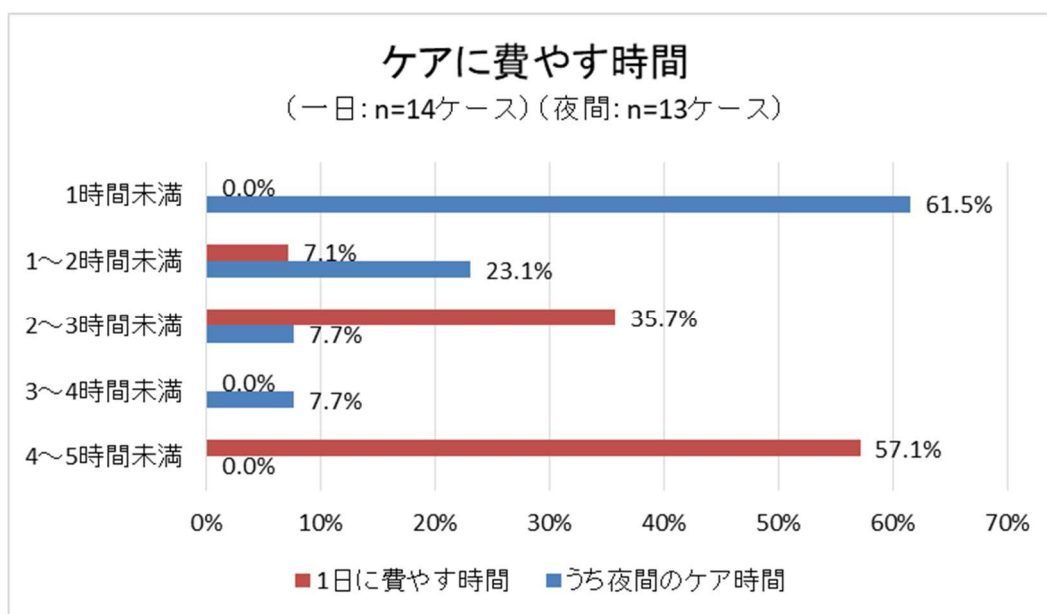


図 20



(7) 子どもが家庭で行っているケアを支援する人の有無

子どもが家庭で行っているケアを支援する人の有無については、「あり」が34.1%、「なし」が54.5%となっている。

ケアを支援する人が「あり」と答えた中では、半数以上が父母や祖父母、きょうだいなど身近な家族があがっており、なかでも祖父母の割合が高くなっている。

図 21

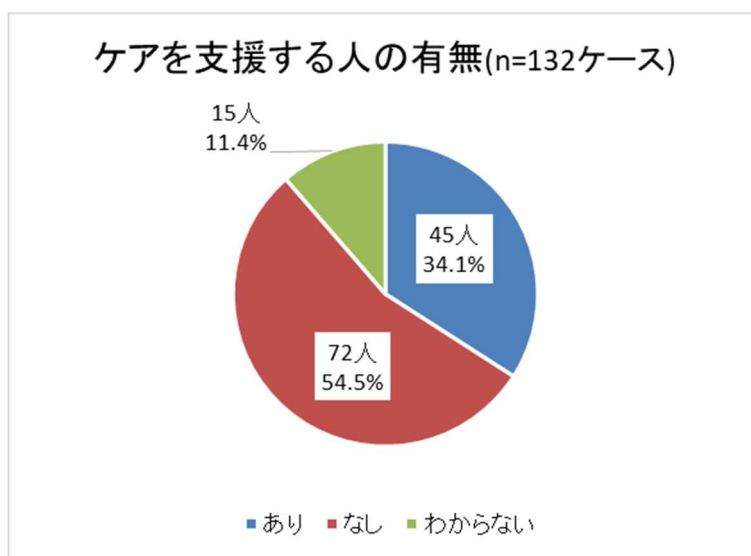


表 14

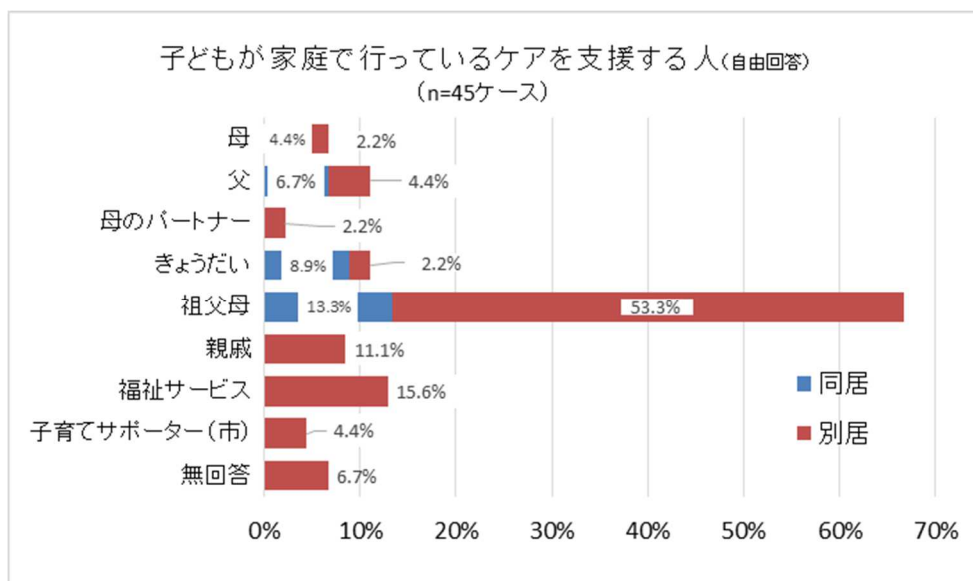
子どもが家庭で行っているケアを支援する人の有無

<学年別・子ども自身の認識の有無別>

(%)

		あり	なし	わからない
全体 (n=132 ケース)		34.1	54.5	11.4
学年	未就学 (n=3)	33.3	33.3	33.4
	小学生 (n=61)	29.5	57.4	13.1
	中学生 (n=46)	45.7	45.7	8.6
	高校生 (n=16)	25.0	68.8	6.2
	所属なし(15~17歳) (n=6)	16.7	66.6	16.7
子ども自身の認識の有無	認識あり (n=16)	31.2	68.8	0.0
	認識なし (n=57)	40.4	49.1	10.5
	わからない (n=59)	28.8	55.9	15.3

図 22



(8) ケアをすることになった理由

ケアをすることになった理由については、「年下のきょうだいがいるため」が63.6%と最も高く、次いで「親が家事をしない状況のため」(46.2%)、「ひとり親家庭であるため」(32.6%)、「他にする人がいなかったため」(31.1%)となっている。

子ども自身の「ヤングケアラー」としての認識の有無別にみると、認識している人は、認識しない人に比べて「親が家事をしない状況のため」「他にする人がいなかったため」が高くなっている。

図 23

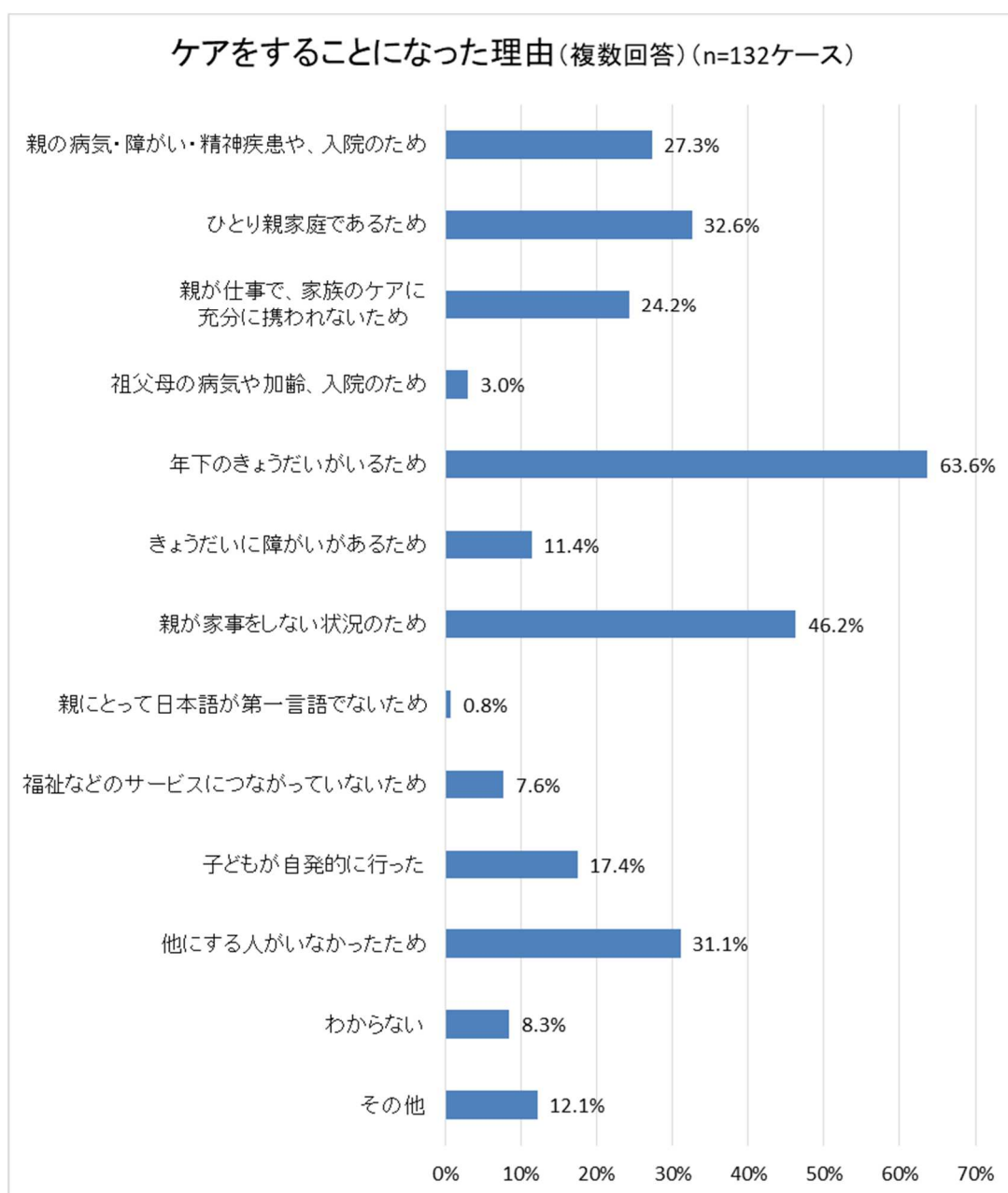


表 15

ケアをすることになった理由(複数回答) <学年別・子ども自身の認識の有無別>

(%)

		親の病気・障がい・精神疾患や、入院のため	ひとり親家庭であるため	親が仕事で、家族のケアに十分に携われないため	祖父母の病気や加齢、入院のため	年下のきょうだいがいるため	きょうだいに障がいがあるため	親が家事をしない状況のため	親にとって日本語が第一言語でないため	福祉などのサービスにつながないため	子どもが自発的に行った	他にする人がいなかったため	わからない	その他
全体(n=132)		27.3	32.6	24.2	3.0	63.6	11.4	46.2	0.8	7.6	17.4	31.1	8.3	12.1
年齢区分	未就学(n=3)	33.3	33.3	33.3	0.0	100.0	33.3	33.3	0.0	33.3	100.0	33.3	0.0	0.0
	小学生(n=61)	26.3	26.2	26.2	4.9	60.7	8.2	41.0	0.0	4.9	6.6	19.7	11.5	6.6
	中学生(n=46)	23.9	43.5	19.6	2.2	65.2	8.7	43.5	2.2	10.9	19.6	32.6	6.5	21.7
	高校生(n=16)	31.3	31.3	37.5	0.0	62.5	18.8	68.8	0.0	6.3	25.0	68.8	0.0	12.5
	所属なし(15~17歳)(n=6)	50.0	16.7	0.0	0.0	66.7	33.3	66.7	0.0	0.0	50.0	33.3	16.7	0.0
子ども自身の認識の有無	認識あり(n=16)	18.8	37.5	25.0	0.0	50.0	0.0	68.8	0.0	6.3	12.5	62.5	6.3	25.0
	認識なし(n=57)	22.8	40.4	26.3	3.5	68.4	14.0	50.9	1.8	8.8	28.1	29.8	5.3	10.5
	わからない(n=59)	33.9	23.7	22.0	3.4	62.7	11.9	35.6	0.0	6.8	8.5	23.7	11.9	10.2